



ワンポイント・アドバイス



マイコプラズマ性乳房炎

マイコプラズマは、細菌よりもっと原始的な微生物で、呼吸器病や乳房炎の原因菌として知られています。1989年、日本で最初の典型的なマイコプラズマによる乳房炎が北海道で確認され、その後は増加傾向にあります。乳房炎の原因菌として何種類かのマイコプラズマが知られていますが、マイコプラズマ・ボビス (*Mycoplasma bovis*)、マイコプラズマ・ボビジエニタリウム (*M. bovis genitalium*) による発生が多く報告されています。

日本では、マイコプラズマ性乳房炎の発生は他の乳房炎の原因菌に比べて少ないですが、マイコプラズマ性乳房炎は、ひとたび発生すれば多大な損害をもたらす伝染性の乳房炎です。発生がまれなもので、あまり知られていませんが、ここ数年根室管内でも散発しています。根室家

畜保健衛生所で検出を確認した頭数は、平成19年4頭、平成20年は52頭、平成21年(1月～8月19日現在)36頭でした。大規模フリーストール牛舎での発生が多いですが、つなぎ牛舎での発生もありました。

マイコプラズマの確定診断には、専用の培地で特殊な培養を行うため、一週間程度かかります。伝染が早く、検査に時間がかかることから、マイコプラズマ性乳房炎と診断された時には、かなりの範囲に感染が広がっている場合があります。また、マイコプラズマ性乳房炎は搾乳を介して伝播されます。よって、ディッピングを含む、普段の搾乳衛生が重要です。このことは、マイコプラズマ性の乳房炎に限らず大切です。

マイコプラズマ性の乳房炎の鑑別ポイント

- 乳房の腫脹・硬結が甚だしい
- 乳汁にブツが多い
- 泌乳量が激減、または泌乳停止
- 2分房以上の複数分房が乳房炎になることが多い
- 食欲および元気は正常なものがほとんどである
- 抗生剤による治療に反応しないことが多い
- 通常の細菌検査で原因菌が検査されないことが多い

右記の症状の乳房炎の牛が多発する

治療: 臨床型マイコプラズマ乳房炎(乳房の腫脹や乳汁のブツなどの乳房炎症状が認められるもの) に対する治療効果は期待できません。その牛が感染源となり、

感染を拡大させる可能性があるため、予後不良と考えて淘汰します。乳房炎の症状が認められない潜在型の乳房炎で、その牛が妊娠している場合や、乳量が多く諦めきれない場合には、隔離の上で治療を行うこともあります。詳しい対応に関しては、担当獣医師との相談になります。

マイコプラズマ発生時の対応

- 臨床型乳房炎牛の隔離、速やかな淘汰(臨床型乳房炎は治療に反応しないため)
- 牛舎消毒の実施
- 搾乳牛全頭の乳汁検査の実施
→ 潜在型乳房炎牛(乳汁中にMpが検出されるが、症状を現していない牛)を摘発
- 潜在性乳房炎治療牛の再検査
- 新規臨床型乳房炎の乳汁検査
- 分娩牛の乳汁検査
- バルク乳のモニタリング検査
- 搾乳牛の全頭検査

Mp: マイコプラズマ

いかに早く

異常に気づくかがポイント

マイコプラズマ性乳房炎を予防する上で一番大切なことは、マイコプラズマ性乳房炎をいかに早く見つけ、適切な対策を講じるかということにあります。マイコプラズマ性ではない乳房炎で、細菌検査で菌が検出されず、治療に反応が悪い乳房炎はたくさんあります。しかし、「これまでの乳房炎とは何か違う」と感じたときはすぐに獣医師に相談してください。対策が遅れたために、100頭以上の感染を認めた農場もあります。

参考文献: 乳房炎防除対策研究会誌 第15号(2009年)、
乳房炎コントロール77
続 テレビドクター

